

ビュルツブルグ大学

今年は、レントゲン（Wilhelm Conrad Röntgen：1845～1923年）がX線を発見した1895年から120年に当たる。

レントゲンは1870～72年に助手としてビュルツブルグ大学に在籍し、その後、物理学教授として赴任（1888～1900年）した時にX線を発見した。1895年11月8日、クルックス管を用いて陰極線の研究をしていたレントゲンは、実験台の上の白金シアン化バリウムを塗布した蛍光紙が光っているのに気付いた。レントゲンは、蛍光作用を起こす何者かが、黒いボール紙で覆われたクルックス管から出ているのではないかと考え、管から2mまで離しても発光が起きることを確認した。これにより、目には見えないが光のようなものがクルックス管から出ていることを発見した。

空気中を透過できる距離が陰極線より長いことから、ほかの物質も透過する電磁波でないかとレントゲンは考えた。この電磁波は陰極線のように磁気を受けても曲がらないことから放射線の存在を確信し、数学の未知の数を表す“X”の文字を使いX線と名付けた。昼夜を通じた実験の末、同年12月28日に“Ueber eine neue Art von Strahlen”（新しい種類の線について（第1報））という論文をビュルツブルグ物理医学協会会長の下に送った。

ビュルツブルグは、フランクフルトからIC（都市間特急列車）で70分、街全体が観光地でロマンチック街道の北の起点に当たり、メイン川の兩岸に開けた教会の多い古都である。

ビュルツブルグ中央駅からRöntgen Ring（レントゲン環状通り）を右に曲がり5分ほど進むとビュルツブルグ大学物理学研究室の建物があり、その壁面には、“この部屋でレントゲンが1895年に彼の名に因んだ線を発見した”と書かれている（写真1）。

そこを過ぎ10mばかり行くとレントゲン記念室の入り口がある。2階の重い扉を開けて入ると広間



写真1 ビュルツブルグ大学物理学研究室



写真2 レントゲンがX線を発見した実験室

になっている。左手の廊下を奥に進むとレントゲンが実際にX線を発見した実験室がそのまま残されており、透明なプラスチックの戸を通して見られるようになっている（写真2）。隣室の戸棚には、X線発見を記した手紙や、諸国から贈られた褒章状、白革に書かれた論文、愛用のパイプのほか、当時の装置や実験器具も展示されており、それらの歴史的展示は見ごたえがある。

■ 参考資料 ■

- 1) 山崎岐男、孤高の科学者 W.C. レントゲン、医療科学社（1995）
- 2) 青柳泰司、レントゲンとX線の発見 近代科学の扉を開いた人、恒星社厚生閣（2000）
- 3) 加藤富三、図説放射線医学史、講談社（1994）

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕